

3167.5
H3C55J
1928
v.1

緒言

本書は當院中女學校第一學年（一般日本語學校の第七學年）用として編纂したのであります。

内容は傳記・教訓談・紀行文・通信文等、廣い範圍に亘つてをりますが、特に現代の教育思潮に鑒み、従来の教科書によく見るやうな理智偏重を排し、主として現代作家の優秀なる文學的作品中、年少學徒に感興の深いもの、若しくは其の實際生活に觸れたものを選択することに意を注ぎました。それは申すまでもなく、語學教授の傍ら、常識の養成・情操の涵養・人格の陶冶に資せんが爲であります。

更に文體の上から見ますと、口語體の作品が最も多數を占めてをります。併し、文語體のものも尠くありません。又少數ではありますが、候文體のものも採録してあります。文語體、殊に候文體の如き、將來追々自ら作る必要がなくなるに到るものといはしても、少くとも之を讀んで理解し得るだけの知識は、現在に於ては無論のこと、將來に於ても、極めて必要であると信ずるからであります。要するに、この様に種々な文體の作品を採録いたしましたのも、材料を多方面に求めたのと同様に、學徒の語學上の知識を偏狭ならしめぬやうにとの考慮に出たのであります。

本書の教材は一學年用としては、その量多きに過ぎるといへませう。教科書は是非初めから終りまで残らず教へて仕舞はねばならぬものとするれば、多くの場合に於て、全くそれに相違ありません。

併し、編者は「教科書は一般の標準を示すに過ぎないもの」といふ見地で、本書を編纂したのでありますから、縦令本書を採用されたからといつても、教員諸氏は一々之に據らねばならぬといふ理由は毫もなく、又そのやうな事は編者の期待して居る所でもありません。それは、一口に同一學年と申しましたも、學校により、又學年度により、生徒の學力・性向等も自ら異り、従つて教材もその時々、の場合により幾多の變更を要するからであります。畢竟、教材に餘裕を置いてあるのも、必要に應じ、之れが取捨撰擇に便し、以て同一教科書を幾多の學校の同一學年にも、或は孰れの年度の同一學年にも使用することの無理を緩和したいといふ趣意に外ならぬのであります。

又教材排列の順序の如きも、大體、生徒の語學の進度・思想發展の經路を標準としたのであります。が、是亦時と場合とにより、教員諸氏の任意に前後變更せられて然るべきであると思ひます。

編者は教材の撰集・加除改竄・排列等につき相當考慮を拂ひ、且つ専門家の閱讀を煩はしたのであります。が、本書はまだく完璧のものでない事は申すまでもなく、或はそれに近いものとさへいふことも出来ずまい。本書の出版に際し、聊か所懐の一端を述べ、併せて諸賢の垂教を懇願いたします。

昭和三年八月

布哇中央學院出版部

新撰中等日本語讀本 前編上

目次

第一課	良寛上人	北原 秋名 (一)
第二課	犬ころ	二葉亭 四迷 (九)
第三課	羊	鈴木三重吉 (一九)
第四課	笑話三題	落語 選 (二四)
	一 疎忽もの	
	二 慌てもの	
	三 感違ひ	
第五課	パリだより	吉江 孤雁 (二六)
第六課	頼春水の立志	興國 讀本 (三五)

- 第七課 勸學
- 第八課 鳳潭
- 第九課 小石と金剛石
- 第十課 動物園
- 第十一課 海底の森
- 第十二課 彌次郎兵衛の川渡り
- 第十三課 ホノルル短信
- 第十四課 蜘蛛の絲

- 高崎 正風(四)
- 池田 林儀(四)
- 松村 武雄(五)
- 坂本 四方太(五)
- 横山 又次郎(五)
- 十返舎 一久(六)
- 岡本 綺堂(六)
- 芥川 龍之介(七)

(注意) 作者の氏名及び書名の右肩に*を附せるは、其作者及び書籍の文中ところぐ加除改竄せることを示す。

目次終

作者略傳

北原 白秋 名は隆吉、早稻田大學英文科に學ぶ、詩人。
 二葉亭四迷 本名長谷川辰之助、文學者、明治四十二年歿、年四十六。
 鈴木三重吉 東京帝國大學出身、小説家。
 吉江 孤雁 名は喬松、早稻田大學教授、文藝評論家、明治十三年生。
 高崎 正風 御歌所の長、故人。
 池田 林儀 雜誌「大觀」記者。
 松村 武雄 文學博士、少年讀物研究家、浦和高等學校教授。
 坂本四方太 東京帝國大學出身、國文學者、大正六年歿、年四十四。
 横山又次郎 理學博士、東京帝國大學教授。
 十返舎一久 本名重田貞一、駿府の人、戯作者、天保二年(二四九一年)歿、年五十七(或は六十八)。

作者略傳

岡本 綺堂 名は敬二、劇作家、明治五年生。
芥川龍之介 東京帝國大學出身、小説家、昭和二年歿。

作者略傳終

新撰中等日本語讀本 前編上

第一課 良寛上人

その一

良寛上人は越後國の出雲崎といふ處に生れました。髪を剃つてお寺に入つたのは十八歳の時だと申しますが、それから七十五歳のお爺さんになるまで生きて居た名高い坊さんでありました。この良寛上人は童心の持主で、世にも珍しい子供好きな方でありました。行く先々で、男の兒や女の兒と一緒に、緒になつて遊び戯れました。「良寛様お遊び